



なきごえ



1987

11

大阪市
天王寺動物園協会

鈴木不二男



イスラエルでの国際ワークショップにて

小学生の頃、「三郎」と名付けた犬を飼っていた。「三郎」は家族の一員のように当人(犬)も思っていて自分が犬だとは考えていなかったと思う。ただし「三郎」は家の中に上れない規則になっていたので、夏など、我々が食事をしている間中、踏石の上いきちんと坐って縁側に首を載せじっと見詰めていたじらしい姿が今でも脳に焼きついている。

青く透き通った眼とすらりとしたプロポーションの持主で「マリ」と名付けたペルシャ猫も飼っていた。「マリ」は興奮すると松の木に駆け上がる癖があり、降りられなくなって父が戦争中の産物であった「火叩き」を差し伸べるなど一騒動したことがあった。

ニワトリも数羽飼っていて卵を自給自足していた。ニワトリなのによく塀を飛び越えて隣の庭に行ってしまうのが一羽いた。白い胸をいつも土や泥で汚す癖のあるものや、抱いてやると喜ぶニワトリもいた。このニワトリは抱いてほしい時には必ず立ち止まって両肢を少し曲げて待っている特異な性格を備えていた。餌をやる時に餌箱をとんとんと叩くと真先にやってくるのも決まってこのニワトリであった。このように同じ動物であってもそれぞれ個性があることを小学生の時に体得した。

昆虫採集も好きで鳴尾ゴルフ場や箕面へ父に連れていってもらった。鳴尾では「アカタテハ」、「ルリ

タテハ」や「コムスジ」などを採集することができたし、箕面では「枝ナナフシ」を捕えたのが私にとっては最も珍しい昆虫であった。

昭和20年3月15日には櫻塚国民学校の卒業式が行われる予定であったが、その前夜に大阪大空襲があったため未だ卒業式をやっていない。この年の中学入試は中止となり無試験で豊中中学(現在の豊中高校)に入学した。豊高時代には生物研究会に入っていたので動物の八幡道生先生と植物の永田治郎先生の御薫陶を受けた。この頃、北隆館から「遺伝」という月刊誌が刊行された。分からないところが多かったが新しい号が出るのが待ち遠しく、メンデル、ド・フリース、モルガンなどのすばらしい研究の一端を伺い知ることができた。八幡・永田両先生の影響で私は生化学を一生の仕事とするようになったと言える。

大学では蛋白質化学の赤堀四郎先生の研究室に入れて頂き、その後、代謝調節の須田正己先生の研究室の門を叩いた。パークレーのカリフォルニア大学生化学部に留学していた時には、嫌気性細菌を培養してビタミンB₁₂補酵素が関与する酵素を抽出し、その作用機構について研究した。帰国後は実験材料を哺乳類に切り替え、ラットの肝臓や脂肪細胞を用いて研究を進めた。最近歯学部にも所属しているので、ウサギの肋軟骨細胞やウシ胎仔軟骨、ヌードマウスなどを駆使して骨や歯のような硬組織がどのようにしてできるかという謎を生化学的に解明するべく努力している。

'82年にはナイロビで開かれた国際会議に招待されたので、会議の後、キリマンジャロの近くのアンボセリ国立公園を訪れ野生の象、ライオン、キリン、サイ、インパラ、ダチョウなど自然の生態を垣間見ることができた。そのほか、フロリダのハイウエイで出合ったアリゲーターやオーストラリアで出合ったエミュも忘れられない。

我々は多くの実験動物のお世話になっているので、年末には動物慰霊祭を行い、その夜は研究室で「てっちり」を賞味するのが恒例となっている。

(大阪大学教授)

なぎごえ11月号もくじ

動物と私 2
..... 3
動物園グラフ・動物園日記 4・5
オランウータン、ユキの誕生 6・7
鳥島のアホウドリ 8・9
キーパーズ・アイ ④ 10
動物園ニュース 11

表紙の写真説明

“カピバラ” (Hydrochoerus hydrochaeris)
南アメリカの水辺の草原や林に住んでいます。
体長は1mから1.3m、体重は50から60kgにも
なる世界最大級のげっ歯類です。体には赤褐色
の剛毛が生え、水泳が得意で、四肢には水かき
がついています。

(撮影：野口秀高)



“ウォータードラゴン公開”

8月21日、広島安佐動物公園からいただいたウォータードラゴン13頭の内、6頭を9月28日から展示公開しています。まだまだ小さいですが、全頭元気に育っています。(撮影：大野 尊信)

動物園グラフ

“すくすく育つオランウータンのユキちゃん”

6月18日に誕生したオランウータンのユキちゃんは、母親のサツキの深い愛情につつまれて順調に育っています。8月24日から一般公開にふみきりましたが、昨年生まれのサブ君に劣らぬ人気を集めています。この4ヵ月間のサツキ、ユキ母子を特集してみました。

(撮影：宮下 実)



生後1週間 ユキにおっぱいをふくませながらサツキもジュースをぐくり。(6月25日)

出産1時間後 担当の大東係員から祝福とねぎらいを受けるサツキ。(6月18日午後6時)



生後45日目 眠っている時もユキをつぶさないように気をつけて。(8月2日)

9・10月の動物園日記

- 9 / 6. 動物映画会を開催しました。
- 9 / 7. スプリングボックのオスの下あご部分のはれが激しいため、麻酔し治療しました。
- 9 / 8. 麻酔をしてブラックバックのボスの精巣機能の検査を行ないました。
- 9 / 9. オオガラゴが交尾しました。
- 9 / 10. ペンギン屋内展示室の空気の細菌検査を行ないました。
- 9 / 12. マレーグマが交尾しました。
- 9 / 13. 動物映画会を開催しました。
アルダブラゾウガメとヒョウモンガメは夏の間、屋外運動場で展示していましたが、

- 本日からハ虫類舎で展示を始めました。
- 9 / 14. バードケージ“鳥の楽園”で自然抱卵していたアカハシリウキウガモが巣を放棄したため、卵をすぐに電気ふ卵器に移しました。
- 9 / 15. 動物映画会を開催しました。
- 9 / 16. ニホンジカのオスが1頭生まれました。
- 9 / 17. マレーグマが交尾しました。
今年生まれのカリフォルニアアシカの子の体重測定を行ないました。
- 9 / 18. フタコブラクダの胸部のかさぶた部分より出血が起ったので、出血治療をしました。アカカンガルーのメス“コリン”のほほの部分のはれ上がっているのので、検査の上、



生後67日目 きょうは一般公開の日、久しぶりに外の空気にあたりましたが、少しソワソワ。(8月24日)



それでも少したつと落ちつき、ユキを抱きながら入園者の反応をみるサツキ。(8月24日)



生後103日目 中庭で日光浴。ユキも表情が豊かになってきました。(9月29日)



生後109日目 芝生の上で憩いのひととき。(10月5日)

- 治療を開始しました。
- 9 / 20. 第29回動物のお話とスライドの会「ホッキョクグマのお話」を開催しました。
- 9 / 23. 動物総合感謝祭が行なわれました。
- 9 / 25. クロサイが交尾しました。
- 9 / 26. ヒクイナを1羽保護しました。
昨年4月に袋から出たフクロギツネの袋の中に、約5cm大の子供のいることが確認されました。
- 9 / 27. 本年6月11日生まれのカリフォルニアアシカのオスが自分から生きた魚を食べるようになりました。
- 9 / 28. ウォータードラゴンの展示を開始しました。
- 9 / 29. ホッキョクグマの内部寄生虫の駆虫を行な

- いました。
- 10 / 1. ボイラーの火入れ式を行ないました。点火はチンパンジーのオス“リッキー”(4歳)が行ないました。
アカカンガルーのまだ赤裸の子供が親の袋(育児のう)から外へ落ち体温が低下していたため、加温し人工哺育を開始しました。
- 10 / 3. 今冬ホッキョクグマの出産が予想されますので、まずは寝室を暗くする準備を始めました。
- 10 / 4. 動物映画会が行なわれました。また「どうぶつえんのグルメたち」展が北園展示館で始まりました。

§ ユキの誕生

昭和61年4月27日、当園にとって待望のオランウータンが生まれ、サブと名付けられました。サブは人工哺育で元気に育って1年が過ぎた翌62年6月18日、サブの妹が生まれました。特に2年連続で子供を作ろうとしたのではないのですが、サブを人工哺育に切り替えたため母親のサツキの生理がすぐに始まり、オスのブルと同居させたところすぐに交尾し、その日に受精したようです。そのあまりの正確さに私自身もびっくりしています。

§ 安産

今回の出産は母親も順調で、特に異常は見られませんでした。サブの時には出産直後に乳頭から少し白い液のようなものが出ているのが見られましたが、今回は見られませんでした。出産前の4月と5月の2回、レントゲン撮影を行いました。1回目はサツキの体が予想以上に厚く、あまりよく写りませんでした。しかし、2回目はきれいに胎児が写っていました。

今回の出産の場合も生まれる直前の6月18日午後



出産後、まもなく、サツキと赤ちゃんを側で観察する筆者

4時半頃、エサを与えると少しそわそわして陰部を触り始めました。これは少し変だ、と思いい、日常作業を終えてから夕方5時頃、サツ

キの部屋へ行ってみると、サツキがもう赤ちゃんを抱いていました。出産は軽く済んだらしくサツキはとても落ち着いていて、私が部屋に入ってもサブの

時と違い怒る様子もありませんでした。へその緒がついたままになっていたの、へその緒を切ってやり、サツキも赤ちゃんも元気で、しっかり抱いているのを確認して、その日はそのままそとしておきました。

§ 乳の確認

翌日、サツキは赤ちゃんを抱いている以外は普段とまったく同様でしたが、今度は是非、母乳で育てたかったの、生後72時間まで哺乳を観察することになりました。しかし、子供はいつに乳を飲んでいない様子もなく、サツキも飲まそうというそぶりをしていないので、とてもやきもきしました。

2日目の夕方、私と宮下主査が泊り込んで最後の観察をすることになりましたが、全く哺乳を確認できず、3日目の朝になってもまだ確認できませんでした。もう生まれて60時間にもなりますし、と同時に子供のサツキにしがみつかり力が次第に弱くなってきた様子なので、宮下主査と相談し、朝の5時すぎサツキを麻酔して、子供を取り上げ、サブと同様、人工哺育に切り替えようと決断しました。そして、まず鎮静剤を飲ませようとしたのですが、サツキは一向に飲もうとしません。鎮静剤を飲まないで麻酔がスムーズにいかないため、なにか良い方法はないかと思案している矢先、赤ちゃんがサツキの乳首をくわえているのを見付けました。ヤッターと思わず叫び、麻酔の注射を準備していた宮下主査と固く



生後一週間
ジュースを飲ませながら母子の観察

握手をしました。乳首をくわえていてもミルクが出ている保証はありませんが、まずは一安心でした。

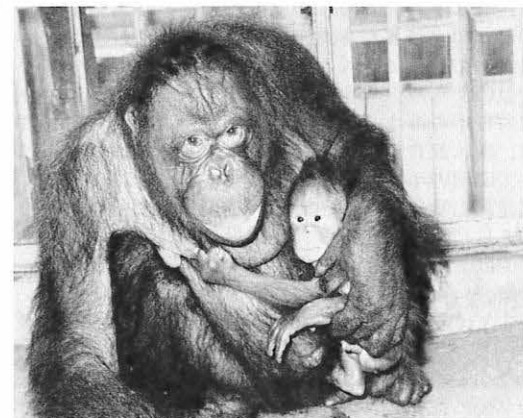
5日目に赤ちゃんがサツキのミルクを確実に飲んでるのをやっ確認できた時には、連日の疲れが一度にふっとびました。母乳を飲んでることが確認できると今度はどれくらい飲んでるのか気になります。まず排便を待ちましたが、なかなかしてくれず、ねばっこく黒い胎便は出たもののミルク便が出たのは生後10日目でした。この便の状態は良く、赤ちゃんも元気なので少し安心しました。

§ 名前の由来

生後2日目の時にこの赤ちゃんはメスであることを確認しました。サツキの第1、2子はいずれもオスでしたから、3番目でやっ長女が誕生したわけです。次男坊のサブは一般公募で名前を募集しましたが、今回の赤ちゃんには私が名付親を務めさせていただきました。名前はユキ、これはサツキのお姉さん格だったオランウータンの名前なのですが、非常に賢く従順なオランウータンでした。しかし、若くして病気で亡くなり、いつの日かこの名を継ぐ優秀なメスが現れてくれることを期待していました。

§ 順調な成育経過

生後10日もすぎるとサツキも食欲がやっ出てきてもりもりとエサを食べ始めました。子供の体重は1900~2000gほどで、サツキの体重は出産後23日目で58.5kgでした。体温も母子共、昼間37.3℃前後で、朝は36.3℃位でした。



生後45日目

サツキの体重もだんだん増え、ユキも次第に体重が増加してきました。この頃、少し外に出して日光浴をさせましたが、サツキはそわそわしてすぐに部屋に入りたがっていました。やはりユキを抱いていて不安なのでしょう。

ユキが乳を飲む時間は初め30秒ほどでしたが、生後1か月もすると長い時で3分間位飲むようになってきました。この頃から私が与えたミルクやヨーグルトなどを口に含んでユキに少し飲ませるようになったため、ユキの便が柔らかくなりました。このためサツキにミルクやヨーグルトを与えるのを控えましたが、サツキが子供をかわいがる様子は人間の母



生後103日目

親以上で、常にしっかりと子供を抱き、子供が眠っているとじっと身動きせず座っています。なんでもない時に子供が泣くと体中

をくまなく見てやっています。ユキも日々に活発になり、サツキを困らせるようになってきました。しかし、サツキは嫌がらずユキの面倒を一生懸命みています。

§ おわりに

私は今回のサツキの出産で、前回と合わせ人工哺育と自然哺育の両方を詳しく観察することができました。これからも観察を続け、環境の違いによる子供の成長の違いを学びたいと考えています。

(飼育課：大東 考 司)

長谷川 博

100年前の鳥島

1889年10月発行の「動物学雑誌」第1巻12号に、服部徹氏による「鳥嶋信天翁の話」というたいへん興味深い記事がのっている。1887年以来、伊豆諸島や小笠原諸島、硫黄列島の水産物・陸産物の調査をつづけてきた彼は、1888年4月から7月まで100日あまり鳥島に滞在した。その間に見聞したアホウドリについて報告したのである。

それによると100年前の鳥島はつぎのようであった。——島全体に八丈島の方言でいうマグサ（ハチジョウススキのこと）が密生していて、その間はすべてアホウドリのすみかになっている。島のなかで3、4か所、とくにアホウドリが密集している場所があり、そこは島民に鳥原とよばれている。山頂の鳥原は最大で、面積は10ヘクタールあまり、幾億万（数えきれないほど多い）の鳥が群れていて、それらの鳴声が非常に騒がしい。ほかにも5ヘクタール、3、4ヘクタールの大集合がある。これらを遠くからながめると白い雪が積ったようで、近くから見ると一大養鷺場のようなものである。また上空を仰げば、鳥の群れ飛ぶ様子が蚊柱のように見え、海に浮いているのは一面に白波がたつたように見えた。——

このなかにくらかの誇張が含まれているとしても、とにかく、数えることができないくらいたくさんのアホウドリが大集団をなして繁殖していたことはまちがいない。

また彼は言う。——近來、人が移住してきたのは一昨年（1887年）11月が最初で、開墾漁労のかたわらにアホウドリを撲殺して生活し、一時40～50人も滞島していたが、今年になって10人あまりに減った。——と。

いまからちょうど100年前、羽毛を採るためにアホウドリは殺され始めたのである。今年にはアホウドリ受難100周年にあたる。

絶滅の淵へ

なぜアホウドリの羽毛が採られたのであろうか？当時、ヨーロッパやアメリカでは鳥の羽毛はふとんやキルトの材料として高値で取り引きされていた。アホウドリは白くて軟かい羽毛をたくさんとっている。しかも密集して繁殖している。現在とはちが



て、100年前の日本は、ヨーロッパ諸国に追いつこうと近代化を急いでいた。当時日本から輸出できるものは一次産品や軽度加工品くらいしかなかった。アホウドリの羽毛に目をつけられたのは当然であった。

アホウドリは鳥島だけではなく、小笠原諸島北部や大東諸島、尖閣列島、台湾周辺の島じまでも繁殖していた。これらの繁殖地でもつぎつぎに羽毛採取が始められた。乱獲につぐ乱獲によって、アホウドリの数は急激に減った。繁殖コロニーはひとつまたひとつと消滅していった。

これに対応して北太平洋からもアホウドリの姿は消えていった。日本の対岸のカリフォルニア半島沖では、100年前までふつうに見られる鳥だったのに以後、急に見られなくなってしまった、と記録されている。

羽毛採取開始から約50年たった1930年代には、とうとう鳥島だけにごくわずかの数のアホウドリが残るにすぎなくなった。1930年2月に山階芳磨先生が訪れた時、約2000羽いた。1932年4月に山田信夫先生が渡った時には500～600羽、翌33年4月には数十羽に減ってしまっていた。ようやく1934年8月に鳥島は10年間の禁猟区に指定されたが、すでに手遅れであった。

1939年8月、鳥島は突然火山噴火をおこした。溶岩を吐き、火山灰を噴き上げた。降下物はアホウドリの営巣地に数メートル以上の厚さに堆積した。アホウドリは営巣地を奪われてしまった。

その後のことはよくわからない。戦争の時代、アホウドリなどにかまっていられなかったということだろう。しかしこの時期に、鳥島から遠く離れた海上で、2、3羽のアホウドリが観察されている。

長い戦争が終ってしばらくした1947年の11月、鳥島で3羽のアホウドリが観察されている。しかし、1949年4月に行なわれた小笠原諸島と鳥島でのアホウドリ調査では1羽も見つからなかった。それで、アホウドリは地球上から永遠に姿を消してしまったと考えられた。

再発見から初めての保護へ

1951年1月、戦後、台風監視のために鳥島に建てられた中央気象台鳥島測候所の山本正司さんは、鳥島南端の燕崎でススキの株の間でひなを育てている少数のアホウドリを発見した。アホウドリ再発見の報に日本のみならず世界の鳥学者が喜んだ。これ以後、現状調査が行なわれ、アホウドリに歴史上はじめて保護の手が届けられることになった。1956年に天然記念物仮指定、1958年天然記念物に指定、1960年6月に東京で開催された国際鳥類保護会議世界大会ではトキとともに世界中で最も緊急に保護を要する種、いわゆる国際保護鳥に指定された。それをうけて、1962年には特別天然記念物に格上げ指定された。

こうした法的保護の整備とともに、鳥島では測候所（後に拡充され気象観測所となる）の人たちによって実質的な保護活動と繁殖状況の監視がつづけられた。これらにこたえるかのようにアホウドリの数

は少しずつ増えていった。

しかし、1965年11月、突然、鳥島で群発地震がおこり、火山噴火の危険性が増した。安全のため気象観測所は閉鎖され、保護活動も絶えてしまった。結局、火山は噴火しなかったが、アホウドリの消息は不明だった。8年後の1973年の春、イギリス人ティッケル博士が鳥島に上陸、調査し、アホウドリの無事と数の増加を確認した。翌年NHKの取材班が上陸して観察し、数の増加傾向を再確認した。だが、それ以後調査はつづかなかった。

最近の調査と保護



アホウドリの雛（3ヶ月令）

1976年11月、私は初めて鳥島に近づき、船上から営巣地を観察した。アホウドリの数の増加は明らかだった。翌年3月には鳥島に上陸して15羽のひなが育っていることを知った。しかしこの時、ひとつの心配が私の

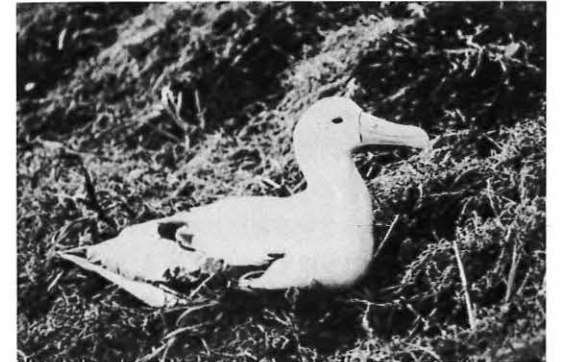
のなかにあらわれた。観察される成鳥の数が多く割には育てられるひなの数が少ない——何か変化がおこっている。これを放置しておくとならぬアホウドリの数は増えなくなってしまうのではないか。この原因が営巣地の植生の後退にちがいないことはすぐに気づいた。

それ以後、その考えの正しさを確かめるために調査をつづけた。そして1980年に多くの専門家の意見がまとめられて、アホウドリ保護計画がつくられた。それは、裸地化している営巣地に鳥島に自生するハチジョウススキの株を移植し、地面を安定させ、アホウドリにとって住みよい営巣地を造ることであった。この工事を行えば、じょうぶな巣がたくさん造られ、産卵数が増える。さらに卵やひなの死亡事故が減り、たくさんひなが育てられるようになると予測した。

1981年と82年に、環境庁と東京都はこの保護計画を実行に移した。その後の追跡調査によって私はこの保護作業が大成功をおさめたことを知った。ススキ移植前は、産まれた卵のうち44%しか巣立たなかったのに、移植した後はそれが60%に向上したのだ。最近3年間に51羽、47羽、53羽と計151羽のひなが育てられた。産卵数は73、76、77個と着実に増えている。（図参照）鳥島のアホウドリの数は現在およそ300羽あまりになった。再発見からここまで回復するのに40年近くかかっていることになる。

残された課題

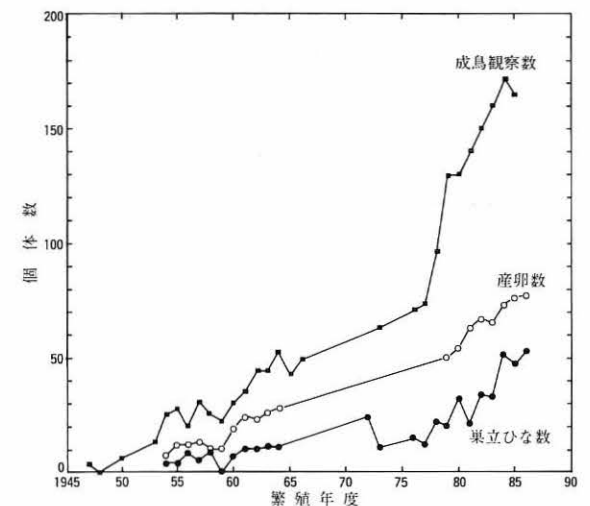
アホウドリは種の絶滅の危機という最悪の状態からどうにか脱出したといえよう。しかし、もう安全というわけではない。鳥島は活火山の島で、いつ噴火するかわからない。噴火による被害にそなえるには、いまのうちにできるだけたくさんひなを残すことである。そしてさらに、火山島でない島にアホウドリの繁殖コロニーを人為的に形成することも検討されるべきである。そのためにアホウドリ



抱卵中のアホウドリ

の繁殖生態や生活史について明らかにされなければならないことがたくさんある。

1971年4月に尖閣列島南小島で琉球大学の池原貞雄教授によってアホウドリの生息が再発見された。ここでもアホウドリが繁殖していることは疑いない。領土問題は関係国間で合意に達していないが、世界的に希少な種であるアホウドリの繁殖を確認し、国際的保護下におくことが必要である。尖閣列島の生息数は約50羽と推測され、地球上におけるアホウドリの総数は現在約350羽と推定されている。



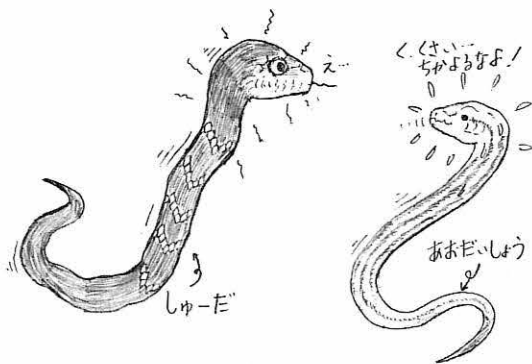
鳥島におけるアホウドリの数の増加

（はせがわ・ひろし：東邦大学理学部生物学教室）

☆ 臭蛇は臭い

動物の名前をカタカナやひらがなで表わすと、その名前の意味が分からなくなってしまうものが少なくありません。シューダという蛇もその一つです。漢字で書くと“臭蛇”と書きます。というのは、この蛇は外敵に襲われた時、身を守るため肛門部から強烈な臭いをだすことからこの名前がつけられたのです。一度位このにおいを体験しても悪くはないと常々思っていたところ、幸い(?)にもこの夏、チャンスがやってきました。このシューダの右目附近が化膿したため、治療しなければならなくなったのです。つかまえて保定しながら消毒などの手当をしている最中、消毒の痛さとつかまえていることが、彼(?)の怒りを誘ったのでしょう、期待通りにやら臭ってきました。鼻をつくようなエグイ臭いで、丁度アオダイショウのそれをさらに濃くしたような感じがしました。思わず口をついて出た言葉は「臭蛇は臭い!!」その時手伝ってくれた実習生にとってもめったにない体験になったのでは……。

エッ、アオダイショウの臭いは、ですって?それ



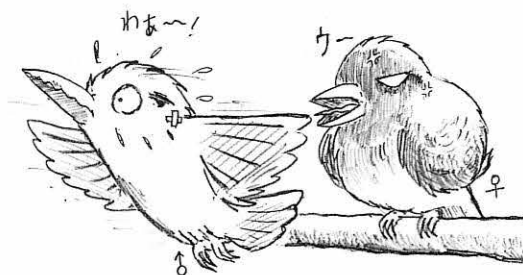
はね、手につくと1日中とれない程の臭い……………例えば玉ネギの腐ったような……………

(飼育課:大野尊信)

(イラスト:藪野幸司)

☆ 僕も花嫁の父?

鳥達の個体識別というのは結構難しいものです。当園のワライカワセも6羽の大所帯になり、だんだん見分けがつきにくくなってきました。



とは言え、よく見ていると体の大きさやくちばしの形、それに雰囲気は少しずつ違ってきます。

おとなしい子、怖がりな子、何を考えてるのかサッパリわからん子。その中でも一番の問題児は古株のおねえさんでした。他の仲間とケンカはするし、目つきも悪く、いつもヒステリックな状態でした。

でも上野動物園からお嫁さんが欲しいという話があり、このハイミスのおねえさんに白羽の矢がたてられたのです。

あれから一月、あのワガママ娘はどうしてるのだろうか?むこうの飼育係の人に嫌がられてはいないだろうか?彼女のいた部屋をそうじする度に、いろんな事を考えてしまいます。

(飼育課:早川篤)

(イラスト:藪野幸司)

動物園ニュース

§ フクロギツネ相次いで誕生

9月25日に夜行性動物舎の予備室に収容しているフクロギツネに赤ちゃんが生まれ、初めて母親のおなかの袋から出ているのが確認されました。この母親は昭和60年5月10日に入園したもので、今回が2度目の出産です。オスの仲が悪いため5月18日から隔離していたものです。

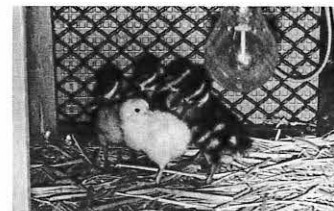


また、展示しているもう1頭のメスの袋の中を26日に確認したところ、約5cm大の赤ちゃんが確認されましたので、こちらも展示室から予備室に移しました。こちらのメスは当園で昨年4月に生まれたもので、今年の3月に続いてもう2回目の出産です。

当園のフクロギツネの出産は非常に順調で、昭和60年に飼育を開始してから5頭目の出産となり、担当者は収容する場所さがしにうれしい悲鳴をあげています。

§ すくすく育つアカハシリウキュウガモ

8月26日にふ化したアカハシリウキュウガモの2羽のヒナは両親に育てられ、“鳥の楽園”の上流のダム池ですくすく育っています。1ヶ月を経た現在、体格は親をひとまわり小さくしたくらいまで成長しました。



人工ふ化したアカハシリウキュウガモのひなもので、途中巣を放棄したため9月13日からふ卵器に入れていたものです。残念ながら1羽は9月29日に死亡しましたが残る4羽は餌付のために入れたニワトリのヒナといっしょに順調に成長しています。

§ アカカンガルーの人工哺育

10月1日の朝、アカカンガルーの赤ちゃんが運動場に落ちているのを担当者が発見しました。体温が下がり、仮死状態だったので動物病院に収容し保温したところ元気を取りもどしました。さっそく人間用の人工保育器に収容し、人工哺育を開始しました。体重はまだ210gで、全く毛もはえてい……………☆……………



現在の飼育動物数

(1987年9月30日現在)

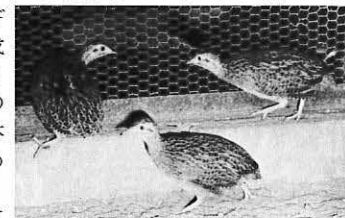
Table with 3 columns: 哺乳類, 鳥類, 爬虫類, 計. Values: 13目 104種 440点, 20目 201種 642点, 3目 36種 101点, 36目 341種 1,183点

ない未熟な状態です。大きさから推定すると、まだ生後95日前後で、袋から出ることのできる大きさになるまでにはまだ150日くらいかかると考えられます。まだ始まったばかりで無事に成長するかどうかわかりませんが、なんとか育てあげたいものです。

§ 今年の人工ふ化結果

本年は人工ふ化を試みる種類を限定したため、あまり多くふ化しませんでした。16種67羽がふ化し、11種35羽が成育しました。

成育したものは、走鳥類ではエミユウ1羽、レア4羽、チリーシギダチョウ3羽が成育しました。チリーシギダチョウの繁殖の成功は日本の動物園では初めてです。



キジ類では目立ったものはありません。大きく成長したチリーシギダチョウのひなですが、ハイロコクジャク4羽、ベニジュケイ1羽、マクジャク3羽、ヤブツカツクリ1羽が成育しました。ヤブツカツクリは3年連続の繁殖です。

カモ類ではオシドリ9羽、カルガモ3羽、アカアシコガモ1羽が成育し、アカハシリウキュウガモ4羽も育すう中です。

§ ボイラーの火入れ式

10月1日の衣替えに合わせて、動物舎の暖房のためのボイラーの火入れ式が行なわれました。ボイラー暖房の設備のあるのはゴリラ、チンパンジー、カバ、は虫類など8つの動物舎で、火入れ式にはチンパンジーの“リッキー”が動物を代表して火入れの大役を務めました。来年5月中旬までに15万ℓの重油が使用される予定です。



● お知らせ

- 動物のお話とスライドの会
11月15日(日) 家畜のお話
12月6日(日) 動物園、この一年をふりかえって
時間:午後1時~2時
於:北園レクチャールーム

● テレフォンガイドのお知らせ

N T T 堺電報電話局では、天王寺動物園の動物のお話やおもしろいエピソードなどのテレフォンサービスを行っています。電話番号は0722-23-0909で、内容は半月ごとに変ります。

★ 休園日のお知らせ ★

ただいま開催中の天王寺博覧会は11月8日までで、以後の休園日は、第3月曜日にあたる11月16日(月)、12月21日(月)と、年末年始の4日間12月29日(火)、30日(水)、31日(木)、1月1日(金)です。

ゆとり満喫、信頼のカード。



ショッピングから海外旅行まで、
1枚のカードでワイドにご利用いただけます。
近鉄がDCおよびVISAと提携した便利な新カード。

近鉄グループカード **KIPS**
(キップス)

◎国内・海外のDC加盟店すべてに通用。
◎近鉄百貨店グループをはじめ、都ホテルチェーンなどでの
ご利用にはいろいろな特典が。

近鉄百貨店 お問合せとお申込みは 各店クレジットセンターへ
●アベノ店7階 ●上本町店10階 ●東大阪店本館 ●奈良店4階 ●西京都店1階
(京都ファミリー)

DEAR LIFE BOOKS



生態・飼育・図鑑が一つの本の
中にギッシリ

中川道朗・岩合徳光/監修
B5変型判・オールカラー
定価580円

動物園で暮らす様々な生き物達、
自然の中ではどんな暮らしをして
いるのか? 動物園での世話
の仕方は? 仲間? など、
写真と精密イラストをまじえ紹
介します。

くらしかいかたシリーズ<既刊本>
B5変型判・オールカラー・各定価580円

むしくらしか
いかた

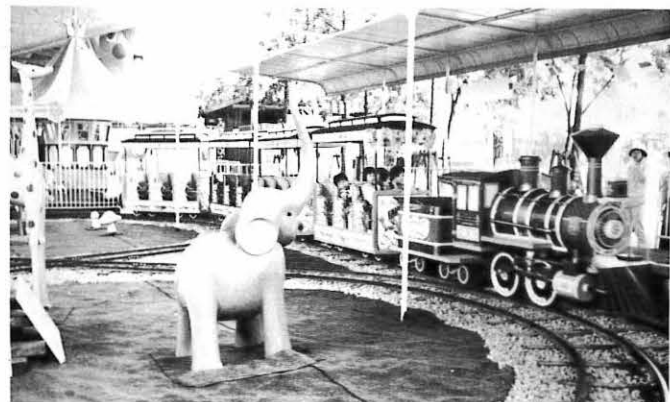
野山でみかける身近な昆虫たち
250種を紹介。

ちいさないきもの
くらしか
いかた

昆虫以外の小さな生き物を320
種紹介。

お求めは、お近くの書店で。 **ひかりのくに株式会社** 本社/〒543 大阪市天王寺区上本町3-2 ☎06-768-1151代表

たのしいのりものが待っています。



1人1回
100円
(1才まで無料)

団体割引
(30人以上)
……1割引

久竹娛樂株式会社
TEL (06) 541-3112

◎園内3ヵ所(南園入口横、北園ステージ横、北園高架下)に各種のりものがあります。

いま、フィルムは
頭脳をもった。



高画質時代をリードする
はるかに美しく

フジカラー SUPER HR

カメラの大林

桜橋本店 ☎341-8091
三番街店 ☎372-5031

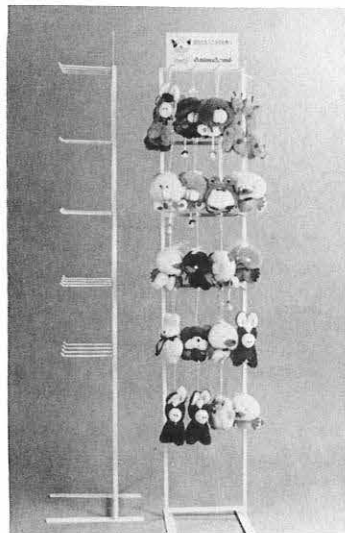


- 貸出品目/ビデオ「動物園へ行こう」
①巻・20分(10本常備)
- 対象/保育園、幼稚園、小学校の先生
- 貸出期間/10日間
- 貸出料/無料(但し、郵送料450円は必要)
- 申込先/当協会まで、電話かハガキで
お申し込み下さい。

動物観察の手引に
**天王寺動物園
ガイドブック**
のご購読をおすすめします。
(1冊¥450)園内各売店にあります。

大阪市天王寺動物園協会

〒543/大阪市天王寺区茶白山町6-74 ☎(06)771-0201



動物ぬいぐるみは 子供のゆかいなお友達

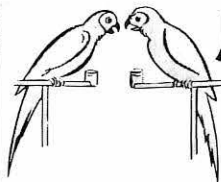
各種ぬいぐるみ企画・製造・卸

有限会社 **アニメランド**

〒547 大阪市平野区西脇4丁目5番22号

TEL: (06) 704-8580

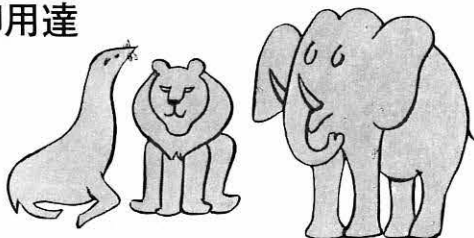
FAX: (06) 704-8565



鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達

- ・医学実験用動物
- ・宣伝用、テレビ用、貸動物
- ・原色世界雑類図鑑(34種1枚もの)要郵便券250円

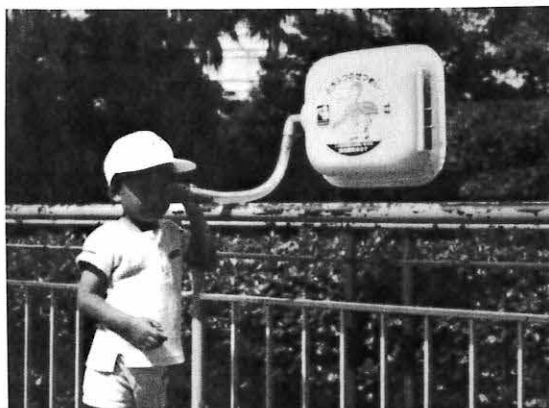


有限会社 **吉川商会**

本社 神戸市中央区中山手通3丁目11番4号
飼育場 兵庫県小野市来住町1513番地

電話(078)221-8195(代)

たのしい動物のお話は、
ガイドマシン(動物説明機)で、どうぞ!!



園内、主要動物舎
30数ヵ所にあります

関西特機株式会社

電話 06-762-2333

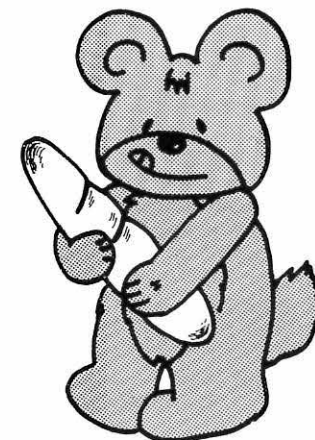
1回 20円

動物園内での お食事、ご休憩は

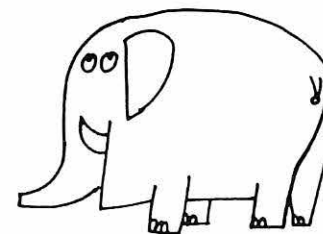
大阪市天王寺動物園内

中央売店

☎ (06) 771-0973



天王寺動物園内



南園売店

代表者 松谷良子

大阪市天王寺区茶臼山町6-74
電話 (06) 771-7110番

園内での写真は...

動物園協会指定写真部へご用命下さい!!



カラー写真 キャビネ1枚 500円

撮影無料にてキャビネ1枚をサービスさせて戴きます。
撮影予約も受付しておりますのでご連絡下さい。

◎随時係員が待機して
おりますのでご説明
に伺いました際は、
よろしくお願い致し
ます。

国際航空写真株式会社

TEL 06-856-7444

もっとおいしく もっと元気に!... 雪印



雪印 ヨーグルト 130g・250g

おなじみの果肉入りヨーグルト

新鮮です、さわやかです。フルーツが入った、おしゃれなヨーグルト。

ホワイトを基調にしたシンプルなデザインで、ヨーグルトのさわやかさにもピッタリです。

野生動物をみんなで守ろう

WE SUPPORT WILDLIFE!

天王寺動物園協会の売店に“WWF国際保護動物ぬいぐるみコーナー”が新設されました。このぬいぐるみの売上げの一部はWWFJ(世界野生生物基金日本委員会)に寄付されます。すばらしい野生動物を私たちの手で大切に守りましょう。

ぬいぐるみ販売コーナー新設



お申込み、お問合わせは——

社団法人 大阪市天王寺動物園協会
(天王寺動物園内) TEL (06) 771-0201

株式会社 ファミリア商事部
TEL (078) 321-0345

●お電話でのお申込みは動物園協会まで。
なお、郵送の場合は実費を負担していただきます。

●WWF(WORLD WILDLIFE FUND)とは?
世界野生生物基金。世界中の危機に瀕している動物たちと、その自然環境を保護するための機関です。



なきごえ 昭和62年11月10日発行 (毎月1回10日発行) 第23巻 第11号 (通巻267号)

編集/大阪市天王寺動物園

発行人/大阪市天王寺動物園協会 中川道朗

印刷所/株式会社 松村善進堂 定価100円(送料共) 1年継続(12部) 1,100円(送料共)

〒543 大阪市天王寺区茶白山町6-74

電話 大阪 (06) 771-0201

振替口座 大阪 37823

編集委員

(土井良彦/伊東重朗/藤野勝吉/樽本 勲/中川哲男/齊田 尚/宮下 実/長瀬健二郎/榊原安昭)
森本委利/大野尊信/野口秀高/早川 篤/藪野幸司/堀 弘/大川光雄/新出悦典/土谷正道)